

GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2011 Number 3

東京外国語大学



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〔編集後記〕ふたたび桜の季節がめぐってきた。本学が東京は府中の地に移転してから刻まれた歳月の手応えを、いつの間にか丈も太さも増した桜の幹に重ねては確かめてみる。ゆく人、来る人、とどまる人、それぞれの眼に映る桜のたたずまいがある。さて三度この地であてやかな桜につつまれる2012年のいまごろ、わたしたちの大学は果たしてどのような変貌を遂げているのだろうか。〔編集子〕

GLOBE Voice

グローバル

2011 Number 3

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2011年3月発行

発行 東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

総務企画課広報係

編集 広報マネジメント室

編集協力 日経BPコンサルティング

印刷 大日本印刷

アートディレクション 大銅健二

表紙撮影 市橋織江

デザイン 茂谷淑恵 (創デザインサイト)

©東京外国語大学2011
本誌記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。

2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。外語大の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。3号目となる今号は、大学とともに歩んできた110年の歴史を持つ「外語祭」を特集しました。

Contents

誇り高き喧騒の世界 — 3

History of TUFFS — 9

学長対談 — 10
オーガニック・ソリューションズ代表 佐藤芳之

graduated active person
in society — 16
料理研究家 若山曜子
コピーライター、クリエイティブディレクター 前田知巳

person doing research — 18
西谷修 / 西井涼子 / 吉本秀之

コラム「聴」 — 24
栗原浩英 / 米谷匡史 / 久米順子

歴史を刻む在学生 — 28

変革する外語大
学部教育を語る ① — 30

News — 31

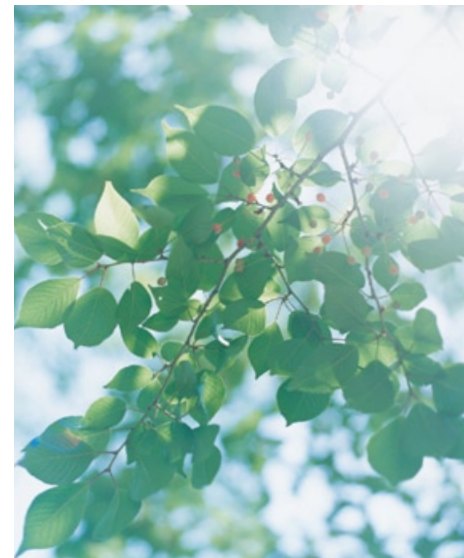
ここにある一枚の写真を
見てほしい。およそ50年
前の外語祭、語劇本番前
の様子だ。語劇に代表さ
れる外語祭は110年
続いており、今や外語大
の歴史そのものともい
える。世界中の音と色と
味とリズムが交差する
日。心地よいカオスの世
界が広がる。

特集
誇り高き

喧騒の 世界



真剣なまなざしで舞台用のメイクをほどこす女子学生。
これから華やかな舞台へ飛び出していく。



世界を 五感で楽しむ日

年に一度、世界の知と文化が一堂に会す。外語祭は、そう呼ぶにふさわしい。

大学とともに歴史を刻んできた外語祭のはじまりは、1900年、前身の東京外国語学校で開かれた講演会だ。戦争や学生紛争などによる中断があったものの、110年続いてきた。



第88回のテーマを表現したオブジェ。

世界各国の言語だけでなく、その国の文化、歴史などあらゆる分野を専門に研究している外語大は、その成果を外語祭で発表してきた。目的は、世界の人々の生活や文化を広く紹介することにあった。この精神は長い年月を経てなお受け継がれ、外語祭に深く根

付いている。お祭りムード一色に包まれる他大学の学園祭とは一線を画すゆえんだらう。

2

010年11月に開催された第88回外語祭のテーマは「可能性 × 楽(おんがく) × 88th Gaigosai」。西ヶ原キャンパスから府中キャンパスに移転して11年、すっかり地域の人々にとっても秋の風物詩になった。

開催期間5日間の延べ来場者数は約3万2000人、地域の人、専攻語で演じる語劇目当てに遠くから足を運ぶ人などさまざま。お年寄りから子どもまで年代も幅広い。

初めて訪れた人がまず驚かされるのは、キャンパスの設計だろう。堀や門がないためか、開放感にあふれている。

一歩中に入ると、円形の回廊とその中の円形広場が訪問者を迎える。広場の真ん中には野外ステージが置かれ、ここで音楽やパフォーマンスなどが披露される。回廊には、ぐるりと26の専攻語の地域料理店が軒を並べる。

外語祭の中でも、この「料理店」と「語劇」は大きな柱であり、外語祭の精神が象徴



料理店では、大きな声で呼び込み、笑顔で接客する姿が見られる。



中央広場を囲むようにして26の専攻語の料理店が並ぶ。



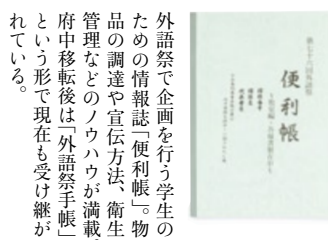
公演教室の番号を持って宣伝するスペイン舞踊部の学生。研究講義棟では、サークルや有志団体による展示や音楽、民族舞踊などを行っている。



〈上〉マレーシアの民族衣装に身を包み、笑顔で接客。
Selamat tengahari(コンニチワ)
〈下〉看板のデザインは集客につながる。目立つが勝ち。



チアリーディング部はパフォーマンスを終え一息。



外語祭で企画を行う学生のための情報誌「便利帳」。物品の調達や宣伝方法、衛生管理などのノウハウが満載。府中移転後は「外語祭手帳」という形で現在も受け継がれている。



学生自らが 丁寧に 作り上げる 「語劇」

1960年代、西ヶ原時代の写真。本番前、メイクをしようとする学生たち。老人顔や子ども顔など、役に応じたメイクテクニクが求められるため、プロの舞台メイクを呼んで講習会もしていたという。黒板に書かれた「コンパ参加と300円」が時代を感じさせる。



的に表れている伝統的な看板
企画だ。

外語祭に出かけるとちよっ
とした世界旅行をした気分を
味わえるという声も多い。日
常でなかなか味わうことのな
い感覚を、リアルに体験でき
るからだろう。

受け継がれるスピリット

「専攻語料理店」

食べ歩きで世界一周
26の専攻語の地域料理とい
っても、市販の既製品を組み
合わせて出すわけではない。

中心となる1年生が、自分の
学ぶ専攻語が使われている国
や地域の料理を研究し、最初
から自分たちで調理する。そ
の地域の定番料理から、日本
ではめったに食べられない(日
本中でも、外語祭だけでしか
食べられない料理も時々ある)

受け継がれるスピリット

珍しい料理を提供する。
なかには、大使館などの協
力を得て、入手困難な食材の
仕入れや、直輸入を行ってい
る専攻語もある。英語のよう
に話される国や地域が複数あ

る専攻語では、年ごとに変化
をつける工夫をしている。

26にも及ぶ国や地域の料理
を食べられる機会はめったに
ないため、外語祭を楽しみに
している学内関係者も多い。

受け継がれるスピリット

「語劇」

外国語習得の実践の場
「語劇」は外語大が専攻とし
て持つ26の言語で、2年生を

世界の華やぎさを キャンパスに



豪華な衣装をまとい、フィリピン舞踊を
見せる。語劇の会場は、2010年
4月に完成したアゴラ・グローバルの
「プロメテウス・ホール」。



〈上〉2008年に発足した
フラ・タヒチアンダンス同好会。
足並みが美しい。
〈下〉アラブの民族舞踊から
生まれたベリーダンス。
1日約10公演を5日間行う。



〈上〉ちょっとした小物にも
国際色が漂う。
〈下〉世界の民族衣装を
体験できる企画。衣装は、
大使館や外語大の教員らの
協力で集めている。



一度きりの 本番のために 重ねる情熱

劇を作り上げるには、
演者だけでなく、製作、
演出、舞台美術、音楽、字
幕、広報、会計などさま
ざまなスタッフが必要だ。
約半年の準備期間で高い
レベルの舞台を作り上げ
なければいけないため、
共同作業における衝突も
あるだろう。しかし、学
生は、語劇体験後には、
劇的に成長する。文字通
り「生きた学習体験」とい
えるかもしれない。

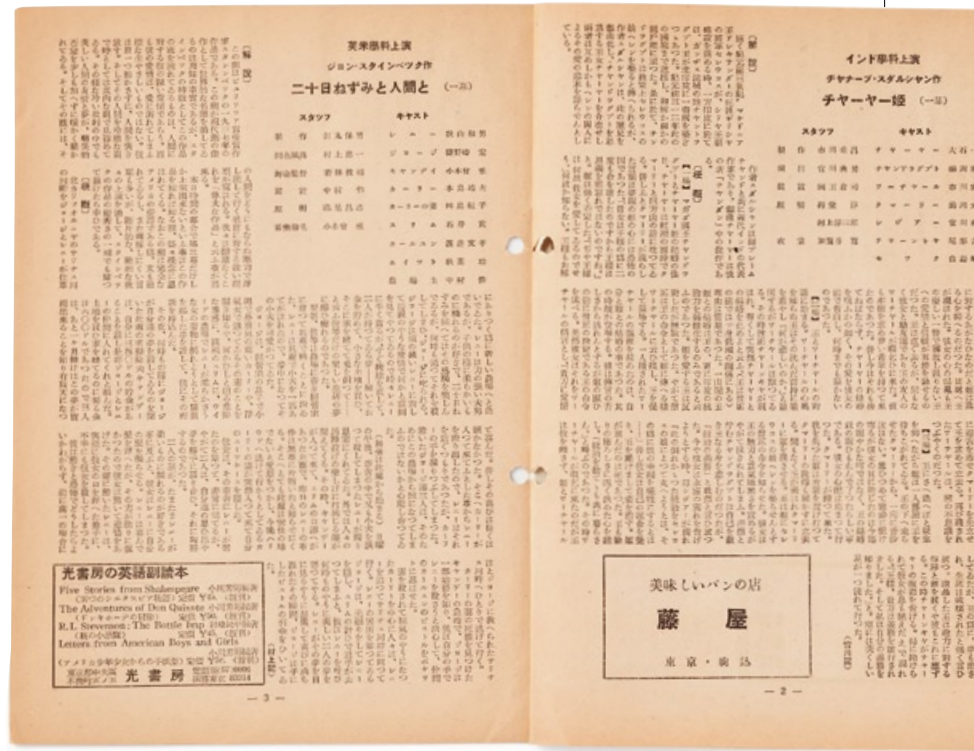
時代とともに
History of TUFFS

「外語祭」と名称を変えた最初の年、1955年の語劇の演目。以後、現在までこの語劇は外語祭の一つの企画として続いている。

演劇部	ベルナール	英語を話せばこの通り
英米	ブリーストーリー	夜の来訪者
ドイツ語	シラー	たくらみと恋
フランス語	モリエール	ジョルジュ・ダンダン
ロシア語	ゴーリキー	どん底
イタリア語	コロッディ	ピノッキオの冒険
イスパニヤ語	ロルカ	素晴らしい靴屋のおかみさん
ポルトガル語	ドアルテ・デ・サ	伯爵夫人と詩人
中国語	夏衍	心防
インド語	ウペンドラナート・アシク	アンジューお姉さま
シヤム語	ル・メイ(蘭タ民話より)	貞淑な未亡人
インドネシア語	ウトウイテ・ソタニ	ブンガ・ルマ・マカン



時代とともに表情を変える個性豊かなパンフレットの。外語祭実行委員会の発行で近年ではコンテストの投票で選ばれたイラストやオブジェが表紙を飾っている。



1950年読書ホールで行われた第3回語劇祭のプログラム。今日のように字幕がなかったため、プログラムには詳細なあらすじを載せていた。

「語劇」とともに歩んだ110年

外語祭の呼び物である「語劇」の起源は、外語大がまだ東京外国語学校であった1900年に行われた「講演会」にある。会場となった東京・神田一ツ橋の高等商業学校の講堂は、紅白の幕や世界各国の旗章などで飾られ、1000人を超える観客で埋めつくされた。各国の大使や皇族など錚々たる名士が招待されていたという。演目は、フランス語によるモリエールの『女学者』、ドイツ語によるシラーの『ウエヘルム・テ

ル』。「講演会」の評判は口伝えに広まり、特に宣伝などを行わなかったにもかかわらず年を重ねることに人気が高まっていった。その後、約10年の中断期間を挟み、「語学大会」(1919年、36年)、「語劇祭」(1947年、54年)と名称変更を経て、1955年に、学園祭(文化祭)色の強い外語祭と語劇を上演する語劇祭が合併し、「外語祭」となり現在に至っている。「語劇」は外語大が誇る伝統ある催しなのだ。▼



26の専攻語の料理店は店構えも国際色豊か。



〈上〉料理店で優勝に輝いた中国語専攻。お客さんを待たせないように手際よく調理する。チームワークが重要だ。〈中/下〉専攻語料理店のメニューは、珍しいものばかり。世界中の料理を手軽に食べられるのが魅力だ。

学生のエネルギーが爆発する場

中心に上演される。セリフはもちろんすべて外国語だが舞台の脇には字幕がリアルタイムで流れるため、内容がわかるようになっていく。

演じる学生の大半は大学に入ってから言語の学習を始める。語劇の準備を開始する、2年生になった頃は、ようやく文法が終わった段階で、流暢に話せるわけでも、文字を見てもすぐに意味がわかるわけでもない。それでも、見てくれる人に通じるようなレベルにするため、4月から猛練習が



「外語祭実行委員」

緑の下のチカラモチ
外語祭という「舞台」の出演者が語劇や料理店、各団体に所属するメンバーだとすれば、外語祭実行委員は外語祭の舞台監督であり脚本家であり宣伝担当だ。3万人を超える

必要となる。ネイティブの先生などから発音指導を受け、同級生を相手に演劇的な対話をし稽古を重ねる。まさに、実践的な外国語習得の場となっている。

受け継がれるスピリット
実行委員会の企画も外語大ならではの。ポンドダンス(チアリーダーイングの踊り部分に特化したダンス)、インドネシア舞踊、ベリダンス、朝鮮舞踊など、7種類のダンスを披露する「ダンスフェスティバル」。世界各地の文字で来場者の名

前を書く「世界の文字で綴る私の名前」。ほかにも、来場者に26の地域の民族衣装を着てもらい写真を撮影する「着てみよう☆民族衣装」など盛りだくさんだ。

ここで紹介したのは、外語祭のほんの一部にすぎない。世界の知と文化が交差する11月の数日間。この光景はこれからも変わらず続いていくだろう。ぜひ実際に外語祭に足を運んで世界の華やきを感じてほしい。▼



学長 亀山郁夫対談

ゲスト

佐藤芳之氏

オーガニック・ソリューションズ代表

大事なことは
「今、何ができるか」

外語大は、世界を股にかけて活躍する人物を数多く輩出してきた。その一人に、アフリカでナッツ事業を成功させ、ケニア有数の企業グループを築き上げた、佐藤芳之さんがいる。佐藤さんがアフリカに魅せられたのは、小石川高校時代。ガーナ独立運動の父・エンクルマ元大統領の半生に感銘を受け、アフリカ大陸への思いを募らせた。語学を身につけるため、外語大に進学。1963年に卒業し、ガーナ大学に留学。ケニア・ナッツ・カンパニーを設立したのは74年のことだ。「世界という舞台上でチャンスをつかむのが、外語大スピリット」。その実現のためにも、語学はしっかり習得すべき」と佐藤さん。「明日を信じて前進する人材を育ててほしい」と母校にエールを送る。

亀山都夫学長（以下、学長） 佐藤さんは、マカダミアナッツをケニアの主要輸出産業に育て上げた功労者として知られています。今、新たな事業に取り組んでいるそうですね。

佐藤芳之（以下、佐藤） 2005年から肥料の開発・販売に力を入れています。ナッツやコーヒーの有機栽培に適した肥料を探していたとき、古くから日本で作られていた乳酸菌や枯草菌などの微生物をベースにした資材があることを知り、自社農園でまいてみました。すると落ち葉が腐敗醗酵して、肥料として作用することが実証できた。70歳までに新しい仕事を始めたかったので、「これだ！」と思いました。オーガニック・ソリューションズ・ケニアという会社を設立し、微生物専門の技術者に加わってもらい肥料作りの製法を確立、一袋40kg、約1000円で売り始めました。さらにこの技術が汚水の消臭・分解にも応用できるということ、トイレ事業も始めました。

アフリカではいまだに「ぼっとんトイレ」が主流です。トイレの穴がいつぱいになると、埋めて次の穴を掘る方式なので、臭いし、ハエも大量に発生する。この臭いとハエをなくせば、住環境改善に役立つはずだ、と。実際にやり始めたら、かなりの効果が出ました。ケニアでの事業も、市役所の汚水処理から工場やスラムのトイレ処理、水処理にまで広がっていった。次にルワンダに行きました。学長 ルワンダは、90年代に内戦で大虐殺が起こった国です。佐藤 ルワンダの首都キガリには、内戦

佐藤さんのような、 桁外れの魅力ある 若者を送り出したい

——亀山



終了後に戻った避難民が住むスラムが、あちこちにあります。「千の丘の国」と言われている土地柄で多くが斜面に位置しています。そのトイレの汚水が地下水を経由して川に流れ込んでおり、極めて不衛生です。このいくつかを試験的に改善したところ、隣国のブルンジやコンゴからも声が届きました。これはビジネス化できるということで、オーガニック・ソリューションズ・ルワンダを08年に設立しました。今、JICA（国際協力機構）

かめやまいくお
1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の翻訳・研究や、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる著書が多い。主なものには「ドストエフスキー 父殺しの文学」、翻訳「カラマゾフの兄弟」罪と罰ほか。

らせている自分や、部族の長になっっている自分を空想していたんでしょう。後にスーダンに行ったとき、サハラ砂漠がバラ色に染まったのを見て、ふと「どこかで見た光景だな」と思った。それは、田舎の海の夕焼けだったんですね。今まで私がやってきたことは、子どもの頃に描いたラフ・スケッチに色をつけているようなもの。夢みるばかりではしようがないので、事業という形で具現化したいと考えたわけです。

さとうよしゆき
1939年生まれ。63年東京外国語大学インド・パキスタン科卒業、同年ガーナ大学に留学。66年からケニア東レ・ミルズ入社。74年ケニア・ナッツ・カンパニーを設立。2005年オーガニック・ソリューションズ・ケニアを設立、08年オーガニック・ソリューションズ・ルワンダを設立、09年オーガニック・ソリューションズ・ジャパン設立。

映画『アウト・オブ・アフリカ』に触発されて

学長 佐藤さんがケニア・ナッツ・カンパニーを設立されたのが74年。夢の具現化に向かって踏み出したわけですね。

佐藤 ケニア・ナッツは数人で始めたんですが、30年後には従業員4000人の会社になりました。ケニアでは従業員1人当たり10人の親族を養っているの、全部で4万人の生活を支えている計算になる。ナッツの生産農家が4万戸ほどですから、1戸当たり4人がナッツの売り上げで生活しているとして16万人、合計約20万人です。その事実こそが、私がアフリカで仕事をする安心感の源であり、存在理由になっているわけです。

学長 お話を伺っていると、佐藤さんの中には、常にリアリストとロマンティストの両面があると感じます。多くの人々の生活を支えているという事実が、佐藤さんの夢を支える原動力でもあると同時に、幼い頃に見た海の光景もビジネスの根幹を支えている。従業員4000人を抱える巨大企業の長といえば、冷徹なリアリストを思い浮かべますが、アフリカの厳しい現実を臆することなくぶつかっていき精神には、ロマンティストの一面も感じられる。今日は、佐藤さんの思いがけない側面を見せていただいたような気がして、ちょっと驚嘆しています。

ところで、ケニア・ナッツの主力商品である『アウト・オブ・アフリカ』は、同名映画（邦題『愛と哀しみの果て』）にちなんで命名したそうですね。

学長 普通は就職が決まれば「一生、食いつぶされることはない」と安心するの、佐藤さんは「このまま終わりにたくない」と感じたわけですね。そのときに見えていたものは、何ですか。佐藤 それは、田舎での原体験が大きかったように思います。私は子どもの頃、よく、海岸の堤防の先まで走って行っては、海に向かって叫んでいたそうです。たぶん、海に向こうのお城で女官をばべ



ケニア人20万人の 生活を支えている、 それが私の存在理由です

——佐藤



佐藤 はい。主人公のカレンは、夫とケニアでコーヒー農園を営んでいたのですが、ある日、農園が火事で焼けてしまふ。彼女は農園で働くケニア人のために奔走するも、イギリス植民地庁に盾突いて敗れ、夫はほかの女性と去り、恋人も事故で死んでしまう。そして失意のなか、カレンはアフリカを去る。でも、彼女のアフリカへの愛は、何にも替え難いものだった。その感動がどうにも忘れられなくて、カレンがこれほど惚れ込んだ大地のことを伝えたい、と思いました。

佐藤 佐藤さんは、アフリカだけでなく米国のカリフォルニアでも、ナッツ事業を展開しています。

佐藤 ナッツの世界で最大のマーケットであり、また生産国であるのが米国なんです。例えば、世界中で生産されるアーモンドナッツ50万トンのうち、45万トンがカリフォルニアで作られている。ここでやらない手はないと思えば、サンフランシスコの設計事務所働いていた娘に声を掛けました。これが当たりましてね。カリフォルニアはもちろん、アフリカやオーストラリア、メキシコ、トルコ、イランなど世界中からナッツを集めて加工し、コカ・コーラの菓子部門やスターバックス、コーヒーのクッキー部門といったトップブランドに営業をかけ、契約に至りました。2010年、以前の5倍の規模の工場をストックトンに新設し、今3交代で操業しても間に合わないほど忙しくしています。

佐藤 カリフォルニアでの事業とアフリカでの事業との間には、どんな関係があるのですか。

佐藤 米国で上げた利益を、再びアフリカに戻すわけです。あるとき、ルワンダでの事業資金がショートし、娘に援助を頼んだところ、すぐにカリフォルニアから送金がありました。これはいいぞ、と。米国で上げた収益をできるだけアフリカでの事業に還元する。アフリカ全土での農業・環境事業を立ち上げるとなると、資金がいくらあっても足りないの、カリフォルニアで上げた利益もその一助として循環させて使っていくわけです。

自ら「歴史を作る」人材を育成したい

佐藤 自らにもダイナミックすぎて、怯えすら感じています。

佐藤 いずれビジネスは世界規模で行うのが当たり前になるでしょう。そこに、外語大のこれからのあると思うんです。今、外語大の学生が、うちのケニアの会社でインターンをしています。毎年、外語大からインターン生に来てもらい、経験を積んで旅立ってほしい。母校が、誇りあるダイナミックな人間を育てられる大学になってほしい——そう強く思いますね。

佐藤 佐藤さんに外語大の活躍の場を広げていただいて、とてもうれしく思います。外語大では2012年からの学部改編にともない、「アフリカ学群」が新設される予定です。「アフリカ学」にかかわる人材を育成し、アフリカに乗り出していく若者を育てるのが目的で、おそらく日本で初の試みだと思います。そのときにイメージしたのが、桁外れの人間的魅力を持つ佐藤さんでした。外語大から、佐藤さんに続く人材が出てほしい——そんな思いがすごくあったわけです。佐藤 たぶん、出てくると思いますよ。ただ、「アフリカ学を一生懸命勉強する」というだけではダメだと思います。佐藤 そうですね。「アフリカについて学ぶ人」を育成するといふより、「アフリカに積極的にいかかわっていく」という意気を持つた人間を育成したい。



佐藤 全くそう思いません。大事なことは「今、何をやるか」。歴史は、自ら行動することで作っていくべきなんです。研究するより歴史を作れ、ということですね。佐藤 言い換えれば、歴史を作る人材を育てる、ということですね。佐藤 過去を追いかけけるのではなく、未来を作ろうじゃないか、と。「ベター・トゥモロウ」を信じる人が50%以上いれば、その国の未来は明るい。そういう発想を持つ人材を育てることが、亀山学長のお仕事ではないかと思えます(笑)。

会社経営は音楽のようなもの

佐藤 おっしゃる通りです。話は変わり

ますが、佐藤さんにとって最も心が慰められる時間とは、どのような時間ですか。佐藤 脳を空っぽにして音楽を聴くときですね。マーラーの曲やヴェルディの『椿姫』。日曜の午前中、燦々と射し込む光の中で聴くマーラーは最高です。寒いヨーロッパで作られた音楽なのに、アフリカで聴いても不思議とピタッと合う。名曲は場所を選ばないんですね。

佐藤 音楽を聴くことが、ビジネスに影響している面もあるのでしょうか。

佐藤 音楽は私にとって、鎮静剤でありビタミン剤であり、ときには怪しげなドラッグでもあります。音楽によって気持ちを解放し、自分を再構築し、心身のバランスをとることができる。

佐藤 佐藤さんはとても豊かな本能をお持ちだと感じます。そういう力が、経営上の直感力やセンスを養っているという実感はありますか。

佐藤 ビジネスでは常に計算外のことが起こります。そんなとき、理の世界から情の世界へフツと移る瞬間がある。私が大切にしているのは「自然か、不自然か」という感覚です。流れが不自然だと直感したときには、注意しなければなりません。ビジネス上の判断をするときには、情を理が追いかけて、会社がつぶれないように手立てを講じることが多いですね。会社経営は、資金繰り、人事、マーケティング、販売などさまざまな要素からなっている。その意味では、オーケストラのようなものかもしれません。

佐藤 会社経営もまさしく音楽なんですね。今日はありがとうございました。■



graduated active person in society_02

言葉の力で、日本を元気にしたい

前田知巳

コピーライター、クリエイティブディレクター

2006年、ニューヨークにユニクロのグローバル旗艦店が華々しくオープンした。当時、そのユニクロを擁するファーストリテイリングの企業ビジョン作成に参加したのが、クリエイティブディレクターの前田知巳さん。外語大のOBだ。

「CEOの柳井正さんからは、『僕と同じ風景を見てくれ』と言われました。クライアントにまさしく『憑依』しないと、コンセプトワークはできない。感応力が試される仕事だと思いますね」

熊本県出身で、「漠然とした脱出願望」から、1984年外語大に進学。中国語を専攻したが、関心は次第に広告の世界へと向いていった。折しも時代はバブル前後。消費社会の牽引役として広告業界が脚光を浴びるなか、前田さんは博報堂に入社しコピーライターとしての道を歩み始める。

入社後はANA沖縄キャンペーンやリクルート『じゃらん』などの広告を担当。言葉よりも映像表現が重視された当時の広告業界では、言葉を大事にする前田さんは



まえだ ともみ
1965年生まれ。88年東京外国語大学中国語専攻卒業。宝島社、シャープ、キリンビール、森ビル、エンジャパンなどの広告を担当。広告以外でも、ユニクロ「グローバル・コミュニケーション」、リクルート「ガテン」などのコンセプトワークやネーミングを手掛ける。

「マイナーな存在」だった。だが、バブルが崩壊すると状況は一変する。企業は「言葉」の信力に注目し始め、前田さん指名の発注が増えていく。そして99年に独立。アートディレクターの佐藤可士和さんを介して、ファーストリテイリングから依頼があったのは、5年前のことだ。

「グループ全体の企業理念を考えてくれないか」。グローバル企業への転換を目指す柳井CEOは、社外パートナーとして前田さんに白羽の矢を立てる。近年の「ヒーローテック」の大ヒットも、前田さんを含めたチームのコンセプトワークによる成果の一つだ。

言葉と格闘し続けて20年。今の自分には、「言葉に対して内省的な」外語大のDNAが生きている、と前田さんは言う。

「日本は元気がないと言われますが、企業の魅力がきちんと伝えられれば、『まだまだ日本も捨てたものじゃない』と皆にわかってもらえる。言葉を媒介にして、この国を元気にしていきたい。それが僕の使命だと思っています」



graduated active person in society_01

幼い頃の憧れを原動力にして

若山曜子

料理研究家

外語大を卒業後、パリで菓子作りを学んだ若山曜子さん。幼い頃から菓子作りが好きで、中学2年のクリスマスプレゼントには電気オーブンをねだった。

「父が連れて行ってくれた東京のレストランで、地元の岡山では見たこともないような素敵なお菓子に出会ったんです」

美しい菓子の写真が満載された料理本を眺めながら、「自分が作ったお菓子や本を通して、家庭でお菓子を作る人が増えたらいいな」と夢を膨らませた。

製菓学校への進学を希望したが、「選択肢は多いほうがいい」と両親に説得され、大学進学を決意。「フランス菓子のルーツを知りたい」と思い、フランス語やフランス文化が学べる外語大に入学した。授業は厳しかったが、そのかいつて、フランス語の基礎が身についた。在学中からパリの語学学校や料理学校への短期留学を重ね、卒業後はパリのエコール・フェランド製菓部門に1年半留学した。「クラスメートは年齢も職業もさまざまでしたが、実習が中心なの



わかやま ようこ
1996年東京外国語大学フランス語専攻卒業。フランス国家資格(C.A.P)を取得。著書に、『スイーツマジック』(文芸化出版局)、『パウンド型ひとつで作るたくさんのケーキ』(主婦と生活社)、『小さいで作るスイーツ』(家の光協会)など多数。岡山県出身。

で、言葉がわからなくても通じ合える。助け合いの精神でチームワークもよく、楽しかったですね」

帰国後、代々木上原のフレンチレストランを経て、表参道のカフェにパティシエとして就職。料理雑誌でレシピを作る仕事を始めたのもこの頃だ。自分が作った菓子が美しい写真となって残り、多くの人々にそのレシピを長く楽しんでもらえる、そんな自分の仕事の可能性にワクワクした。そして「いつか自分の本を出したい」という思いを募らせた。

若山さんはカフェで働きながら夢の実現に向けて動き出す。「フライパンで手軽に作れるお菓子のレシピ集があったらいいな」と思いつき、企画を出版社に持ち込んだ。話はとんとん拍子で進み、『フライパンカフェ』(主婦と生活社)を出版。これにより念願の料理研究家としての道を歩み始めた。幼い頃の憧れを原動力とし、自らの手で夢をつかんだ若山さん。

「今後は世界各地の料理を学び、日本の家庭に紹介したいです」と、その思いは尽きない。

言葉の造形力が世界を動かす

Interview with Osamu Nishitani



にしたに おさむ
1950年愛知県生まれ。東京大学法学部卒業、東京都立大学大学院仏文科修士課程修了。79〜82年パリ第8大学に留学。フリーランスの執筆活動を経て、82年より明治学院大学文学部に奉職、同大教授を経て、2000年東京外国語大学大学院地域文化研究科・国際協力講座教授に就任、09年より現職。

西谷修教授

大学院総合国際学研究院・先端研究部門

グローバルゼーションの問題は、言葉の造形力を抜きにしては語れない。――そう語る西谷氏の研究業績は、実に多彩だ。20世紀フランス文学・思想から、戦争論、世界史論、ドグマ人類学、医療思想史、グローバル・スタディーズまで。融通無碍の発想を培ったのは、30代半ばまでの風来坊生活だった。

文・吉田耀子 写真・高伸建次

結実していく。

36歳の風来坊、大学教員になる

西谷氏の経歴は実にユニークだ。1968年東京大学法学部に入學。安保闘争のさなか、「最も役に立たないことで人生を費やそう」とフランス文学を始めた。卒業後、東京都立大学の大学院に進み、79〜82年、フランス政府給費留学生としてパリ第8大学に留学。ここで西谷氏は、ブランシヨの思想的遺言ともいわれる著作『明かしえぬ共同体』に出会う。

「これこそ自分の書きたかったことだ」――そう直感した西谷氏は、帰国後に本書を翻訳し、原稿用紙80枚分の解説を付けて出版。これがきっかけで、『現代思想』などの雑誌から原稿の執筆依頼が舞い込むようになる。

フランス語の辞典の編集をはじめ、さまざまなアルバイトをしながら執筆活動を行い、論壇でも注

インターネットなどの普及にともない、政治、経済、社会

の変化は地球規模で進みつつある。だが一方では、経済格差や紛争の拡大、環境問題など、さまざまな問題が浮上しているのも事実だ。

「グローバルゼーションの問題は、政治的・経済的観点だけでは理解できない。世界を動かすのは言葉や考え方であり、それがこそ世界を造形しているからです」と、西谷修氏は語る。

その好例が2001年の「9・11」だ。米国が掲げた「テロとの戦争」という言葉は、新しい戦争の枠組みを作って、瞬く間に世界中を席巻。イラク戦争には多くの国が関係することになった。

「言葉の造形力によって人はどう動かされるか、どのように世界像が作られるのか。それを思想的に考えないかぎり、問題の本質は理解できないのです」

戦争論、世界史論、ドグマ人類学、医療思想史、クレオール文学・思想、そしてそれを統合する

グローバル・スタディーズ――西谷氏の研究テーマは多岐にわたる。その原点ともいえるのが、ジョルジュ・バタイユやモーリス・ブランシヨ、エマニュエル・レヴィナスを中心とする、20世紀フランス文学・思想への関心だ。

「20世紀に入ると、〈死〉が避けがたいテーマとなり、文学と哲学が急速に接近します。それまでは人が生きる世界のことを考える哲学と、生きることを表現する文学は、〈死〉というものを扱っていませんでした。それが、万人が戦争に巻き込まれ、誰もが死から逃れることができない時代になります。〈戦争の世界化〉は大量死をもたらし、死が本格的な考察の対象となったのです」

自分の死をコントロールできない状態で、猛烈に苦しみながら生きていく――それが人間の基本的な条件であるとすれば、そこから何が考えられるのか。西谷氏の探究は、1990年に出版された処女作『不死のワンダーランド』に

ラマや、ドグマ人類学を提唱する法制史家ピエール・ルジャンドルと出会う。

「ルジャンドルは、『人間とは言葉で生存を組織する動物』であると主張し、西洋文明を徹底的に批判していた。また、ベンスラマはイスラム世界とヨーロッパとの関係について示唆を与えてくれた。彼らとの20年近い交流は、自分自身の考えを明確にするのにたいへん役立ちました」

パリでの出会いを機に、西谷氏はフランス文学から思想史へと研究の軸足を移していった。それは後年の「グローバル・スタディーズ」につながる。

ズ」につながっていく。

2000年、東京外国語大学大学院・国際協力講座の教授に就任。JICA（国際協力機構）など外部機関との連携講座もあり、そこで西谷氏は中山智香子准教授（現・教授）とともに、「グローバル・スタディーズ」を立ち上げる。これはグローバル化がもたらす諸問題に領域横断的に取り組む実践的研究の試みとしてスタートした。

研究の方向を決定づけた9・11という出来事

9・11が勃発したのは、外語大に赴任した翌年のことである。雑誌『世界』に寄稿した論考をきっかけに、西谷氏は米国政策批判の急先鋒として一躍、論壇の注目を浴びた。こうした経緯から、グローバル・スタディーズも、9・11後の世界と日本の激動に照準を合わせることとなる。

国際協力講座は2000年から08年まで続き、各界からゲストを招いて公開シンポジウムやワークショップが行われた。ルジャンドルや『DAYS JAPAN』編集長・広河隆一、ペシジャワール会の中村哲医師、アルジャジーラのジャーナリストなどが講師に招かれ、05年には、西谷氏が日本に紹介した映画『ダーウィンの悪夢』のザウパー監督を招いてワークショップを開催。また、沖縄の問題にも

終始一貫して取り組んできた。

「グローバル・スタディーズのほかに、研究者としてまだまだやりたいことは多い。〈世界史〉という思考の枠組みについて理論化する仕事もしたいし、今、ルジャンドルが進めているドグマ人類学のプロジェクトにもかかわりたい。さらに、研究者としての原点ともいえる、〈死〉の問題にも再び取り組みたいと思っています」

西谷氏の活動は、従来のアカデミズムの枠にとらわれない柔軟性と広がり richness である。その融通無碍な発想が、「36歳までは風来坊だった」という型破りの経歴に由来していることは言うまでもない。

「外語大の学生には、まず世の中に出て社会経験を積むことを勧めたいですね。人生は長いだから、いくらでもやり直しがきく。ふとしたきっかけで始めたことが、その後の道を開いていくことも少なくない。正しい決定をしようと思えば、とりあえず始めてみたほうがいい。いろいろ試行錯誤しながら、自分が本当に納得できる生き方を選べばいいのです」

人生は、目的に向かって真っすぐに進むことが正解とは限らない。回り道にも必ず収穫があることを西谷氏は誰よりも知っている。■



西谷氏はこれまで数多くの著訳書を世に送り出してきた。



〈上〉学外との連携を強め、各界からキーマンを招いて公開シンポジウムを開催。写真は、研究講義棟1階で開催したナクトウェイ・広河ジョイント写真展。
〈右〉中東の衛星テレビ局、アルジャジーラを訪問した。
〈左〉グローバル・スタディーズでは、沖縄の問題にも一貫して取り組んでいる。

フィールドワークから普遍的思考を目指す

Interview with Ryo-ko Nishii

厳格なイスラム法の下では、ムスリム（イスラム教徒）が異教徒と生活を共にし、ましてや結婚することなどあり得ない——そんな常識を根底から覆す南タイの村で、20年間にわたりフィールドワークを実施。その多様な宗教実践の状況を明らかにしたのが、西井涼子氏だ。

西井氏が南タイ西岸の村で調査を始めたのは、博士課程に在籍していた26歳のとき。知り合いから紹介された10以上の調査候補地を、実際に訪れ選んだ。ムスリムと仏教徒が平和に暮らし、通婚すら結ぶこの村で、異文化共存の本質を見出した。

「ムスリムと仏教徒は一見、違うように見えますが、『平和でよい生活をした』という思いは変わらない。宗教や慣習が違って、人はつながりがある存在だと理解できれば、無用な偏見を減らすこともできる。フィールドワークを行うことの意義も、そこにあるのではないのでしょうか」

未知の世界を探検する人類学者に憧れて

西井氏の人類学者としての原点は高校時代にさかのぼる。きっかけは、妹から贈られた一冊の写真集だった。アマゾン奥地のヤノマ族を撮影したその写真集には、人類学者による解説が収録されていた。世界各地の秘境に分け入っていく、探検家然とした人類学者たち——そのイメージが、未知の世界への憧れに火をつけた。

京大・同大学院に進学して人類学研究に取り組み、1986年にタイのタマサート大学に留学。人類学者未踏の地であった南タイ西岸の村で、2年4カ月にわたる1回目の調査をスタートさせる。仏教徒が95%を占めるタイにあつて、マレーシア国境に近い南タイは、人口の60〜80%をムスリムが占める特異な地域である。「ムスリムはイスラム教の慣習を頑なに守って生きている、という

イメージがありました。では、ムスリムと仏教徒が混住している南タイの村では、人々はどのように生活し、どんな影響を与えあい、どうやって婚姻関係を結んでいるのか。その実態を、調査によって明らかにしたいと考えたのです」

人類学の調査の基本はフィールドワークだ。調査地の人々の慣習や考え方を理解するには、まず現地の言葉を習得しなければならぬ。その意味でも、現地に一定期間居住することが大きな意味を持つ。長期のフィールドワークとは、人類学者として独り立ちするため「通過儀礼」でもあるのだ。

とはいえ、単身、異境に飛び込んでの調査は容易ではない。西井氏はさまざまな壁に直面した。「滞在先では誰もが協力的とは限らないし、特定の人と親しくするのを快く思わない人もいます。例えば、調査でムスリムと会う機会が多くなると、仏教徒から『あの日本人はムスリム側だ』と思われる。調査に支障をきたさな



にしりようこ
1983年京都大学文学部卒業、
86年同大学大学院修士課程社会学専攻修了、
同年タイ国タマサート大学へ留学、
91年京都大学大学院博士後期課程を単位取得後退学。
日本学術振興会特別研究員を経て、
94年東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、
98年同助教授。2010年より現職。博士（文学）。

西井涼子教授

アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス研究企画センター
人類学者未踏の地であった南タイ西岸の地で、フィールドワークを敢行。

そこは、ムスリムと仏教徒が共存し、影響を与えあう稀有な村だった。「人類学は、煎じつめれば家庭やスポーツ、芸術と同じ」と語り、フィールドワークから人間性を追究する普遍的思考を目指す。その視線の先には、新たな学問の可能性が広がっている。

文・吉田輝子 写真・高伸建次



托鉢にお布施をする元ムスリムの女性。仏教に改宗した（南タイ西岸）。



2004年以降、暴力事件が頻発するようになった、南タイ東岸のパタニで暮らす子どもと。写真中央は西井氏。

いために、人間関係にはかなり気を遣いました」
だが、次第に興味深い事実が明らかになってくる。
あるムスリム世帯を訪れたときのことだ。調査項目の一つに「出家経験の有無」があったが、仏教徒と違ってムスリムには出家の慣習が当然ないと思っていた。そこで、ムスリム世帯ではその質問を省くことにしていたのだが、うっかり出家経験の有無を尋ねてしま

つた。すると、なんとムスリムであるはずの母と長女に、出家経験があることが判明。「ムスリムが仏教儀礼を取り込む」という世界的にも稀有な事例が、ふとした偶然から明らかになったのだ。88年に帰国した後も、1、2年に一度のペースで現地調査を重ね、その成果は「死をめぐる実践宗教南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティブ」（2001年刊）に結実した。

人類学が切り開く新しい可能性

人類学という学問の一番のおもしろさは、フィールドワークにあると言つても過言ではないだろう。生身の人間とのふれあい、思考のスパークをもたらし、新しい知見への導火線となっていく。「フィールドワークに行く、自分が生きる世界との違いを痛感させられます。それが、自分自身の生活を振り返るきっかけとなり、人間についての考察を深めることができるのです」

そう語る西井氏だが、初回調査から20年の歳月を経た今、研究者としての転機を迎えつつあるという。その契機となったのが、結婚・出産・育児の経験であった。二児の母となり、タイやイギリスでの在外研究の折には、ベビーカー持参で子連れ渡航を行う。家

庭を持つことによつて、研究に対する考え方も大きく変わった。「二見、家庭生活と人類学は別個のものに見えますが、『人とかかわり』が焦点になるといふ点では、共通する面もある。その意味では、研究も日常生活も、煎じつめれば同じものではないか——そんな思いが強くなったのです」
人類学はスポーツや芸術とも密接な関係がある、と西井氏は言う。「フィールドワークにより、自身の身体を通して感じたことを、文章にまとめて伝える。それが人類学の調査報告だとすれば、人類学研究はスポーツや芸術ともつながる部分があるのではないか。研究対象を外から見るとはなく、自分自身が身体を通して感じたことを、徹底的に意識化していく。その作業を通じて、研究にも新たな広がりを持たせることができるのではないか、と思うのです」
研究者自らが意識化を徹底させることによつて、人間性を追究する普遍的な思考を目指す——この作業を突きつめれば、人類学や哲学といった学問分野の壁は意味を持たなくなる、と西井氏。「外から研究対象を理解する」という従来の壁を突破したい。今は「自分」を入れた民族誌を書いてみたいと思います」
その明いまなぎしは、人類学が内包する新たな可能性に向けられている。■



マレーシア国境に近い南タイは、人口の60〜80%をムスリムが占める地域である。



異文化共存の実態をまとめた『死をめぐる実践宗教 南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティブ』（世界思想社）。

科学者の創造の瞬間に迫りたい

Interview with Hideyuki Yoshimoto

万有引力の法則を発見したニュートンは、近代科学の祖としてあまりにも有名だ。だが、そのニュートンが「錬金術師」でもあったことは、意外に知られていない。

「科学」というと、歴史を超えた普遍的な学問と思われがちです。しかし近代科学の成立期には、今の科学とは明らかに異質な「科学」が存在していた。科学もまた、ある時代背景のなかで人間が生み出した、一つの文化といえる。そこに科学史のおもしろさがあります」そう、吉本秀之氏は語る。

科学史は、自然科学と人文科学の中間に位置する学問分野である。その日本における草分け的存在ともいえるのが、吉本氏の出身校である東京大学教養学部だ。理系で入学した吉本氏は、大学に入って初めて知った「科学史・科学哲学」を専攻。学際的研究のおもしろさに惹かれていった。

専門分野は、17世紀の科学史。17世紀といえば、フランシス・ベーコンでもあったのです」

だが、研究にあたっては、さまざまな壁が立ち上がった。「元素記号を使う今の化学と違い、この時代には、日常的な言葉が化学用語として使われていた。それを現代の言葉に変換するのは、容易ではありませんでした」

当時の化学が錬金術と不可分の関係にあったことも、研究を一層困難にした。「錬金術では、重要な発見を部外者から隠すために意図的にわからないようにする、つまりメタファーを使う伝統があります。これに慣れるまでに、かなり時間を要しました」

さらに、国内で入手できるボイルの資料も皆無に等しかった。そこで、吉本氏は、ボイルがどんな文献を参照し、自らの思想形成に利用したのかを明らかにしようと思いつく。とりあえず、「ボイル全集」全6巻をくまなく調べ、ボイルが引用している文献のリストを作成することから始めた。

とはいえ、文献の原典に当たらないかぎり、できることは限られている。転機となったのは、ある研究者との出会いだった。

アイコン、デカルト、ニュートン、レイブニッツなどを輩出した、「科学革命」の時代だ。ルネサンスや宗教改革を経て、中世的なキリスト教的な世界観が崩壊し、科学上の新発見が相次いだ。「西欧中世のスコラ哲学では、宇宙の中心に地球があり、すべての天体は地球の周りを回転しているとされた。重要なのは、この閉じられた世界の外側に、神が存在すると考えられていたことです。宇宙はつながっていて、天体の力が人間や地球に影響を及ぼすと信じられていたのです」

この幸福で安定した世界観は、コペルニクスの登場によって覆される。コペルニクスの地動説は、地球を宇宙の中心から宇宙の片隅に追いやった。神のもとで予定調和の世界に生きていた人間は、突然、無機質な宇宙空間に放り出されてしまったのだ。

「地球が無限の宇宙に浮かんでいる——この感覚は、当時、深刻な不安を引き起こしました。パスカル

ある日、ベルギーのリエージュに住む平井浩博士が吉本氏のホームページを見つけ、メールで連絡をとりあうようになった。「2005年にボルドーで、ボイルについてのシンポジウムが開催されます。ボイルについて一緒に研究しませんか」

そう平井氏に誘われ、インターネットを活用して日本とベルギーの間で共同研究をスタートさせた。そして、ボイルの鉱物学思想がヨハン・ゲルハルトの著作をソースとしていることを突き止めた。「ヨーロッパでも原典を所蔵する図書館は少ないので、平井さんのつてをたどり、ドイツからゲルハルトの著作のデジタルコピーを取り寄せました。ボイルがその文献をどこで引用しているか調べたところ、理論の根幹をなす決定的な部分で使っていることがわかったのです」

研究進展のカギは国際化とデジタル化

その成果を、05年の国際シンポジウムで共同発表した。発表が終わると「Congratulations!」と司会者から祝福された。

「この会議には世界中のボイル研究者が集まっていたので、これが世界初の発見だということ、即座に理解してもらえた

ルなどは神経過敏症になり、隣に物を置いておかないと「宇宙の深淵に落ちてしまうのではないか」と不安になったほどです」

旧来の価値観の崩壊により、人々が直面した精神的危機。それを克服するためには、新しい「答え」が必要だった。実際のところ、宇宙はどのように成り立っているのか——知識人の間に、新しい科学的知見への渴望が生まれる。それが近代科学の黎明をもたらしたのだと、吉本氏は語る。

科学者・錬金術師であるボイルに魅了されて

吉本氏が大学院時代から一貫して研究に取り組んでいるのが、「ボイルの法則」を発見したことで知られるロバート・ボイルだ。「研究を続けるうちに、ボイルが非常に興味深い人物であることがわかってきました。彼は科学者であると同時に、金属の変成の可能性を信じて実験を繰り返した錬金

日本から一歩飛び出せば、世界の第一線で研究ができる——吉本氏は確かな手応えを感じた。ボルドーでの交流を機に、世界的なボイル学者マイケル・ハンター、ブルガリア人研究者ヨルダン・アブラモフと3人で共同研究をスタート。その成果は「Robert Boyle Project, Occasional Papers No.4」として出版された。

さらに、折からのデジタル化の流れも追い風となった。欧米では図書館の蔵書デジタル化が進み、今では17、18世紀の英語文献のほとんどがインターネット上で参照できるという。国際的な研究者ネットワークの広がりと、デジタル化の進展、これらが両輪となって、今後は加速度的に研究が進むだろう、と吉本氏は期待を寄せる。

当面の目標は、博士論文の執筆だ。これまでの調査結果の集大成として、ボイルの思想形成の過程を明らかにしたい、と抱負を語る。「科学史の世界では、史料による検証が不足しているのが現状です。ボイルが着想を得た具体的なプロセスに焦点を当てることで、人間ボイルがインスピレーションを受けた「現場」をキャッチしたい、と考えています」



よしもと ひでゆき
1981年東京大学教養学部卒業、88年同大学院理学系研究科博士課程。所定単位修得退学。理学修士(東京大学)。専門は科学技術史、科学技術論。17世紀科学革命期の科学史を研究し、特に伝統的なロバート・ボイル像についての全面的な見直し作業に貢献している。

吉本秀之 教授

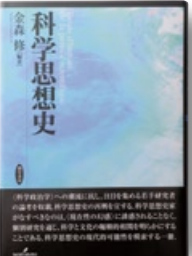
大学院総合国際学研究院・言語文化部門

普遍性を追求する科学の世界も、時代背景と不可分の関係にある。「科学革命論」の立役者となった科学者たちもまた、17世紀という自らが生きた時代の影響を免れなかった。彼らはどのようなプロセスを経て、科学上の発見へとたどり着いたのか。吉本氏は国際的ネットワークとデジタル化をフル活用して科学史研究を進展させた。

文・吉田耀子 写真・高伸建次



国内外の図書館から取り寄せた、大量のマイクロフィルム。今ではデジタル化の進展により、海外の資料に関しては、ほぼインターネットで入手できるようになった。



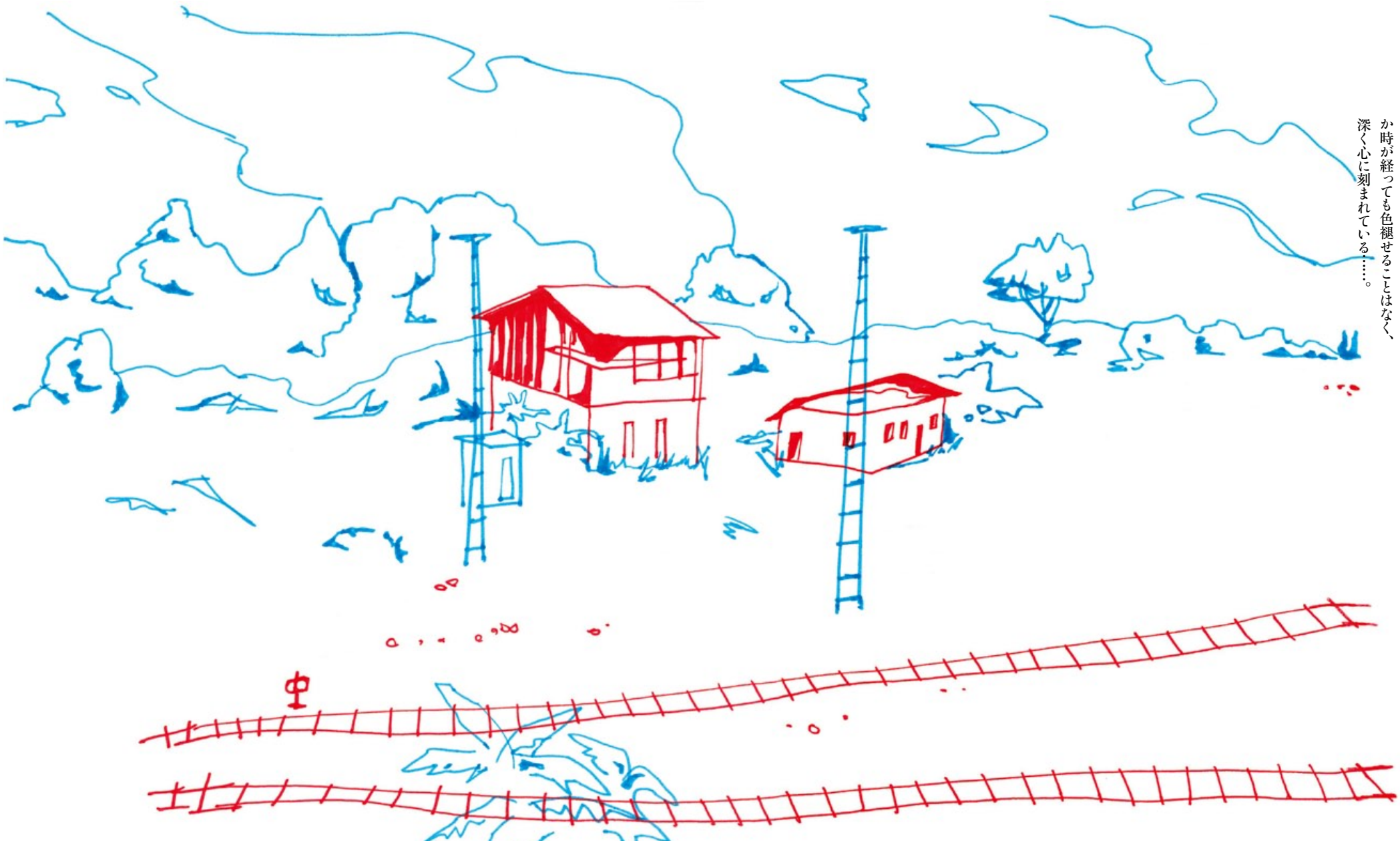
昨年夏に出版された金森修編「科学思想史」(勁草書房・2010年)。「第5章ロバート・ボイルの化学——元素・原質と化学的粒子」の執筆を担当している。

吉本氏は、ボイル研究者の国際的ネットワーク「ボイル・プロジェクト」の主要メンバーの一人だ。

「聴」

KIKU

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。



私のベトナム語のルーツ 1.

アジア・アフリカ言語文化研究所
情報資源利用研究センター 教授
栗原浩英
Text: Hirohide Kurihara

自分の 話しているベトナム語が、ベトナム人にはどのような聞こえをするのだろうかと思う。私自身、ベトナム人が話すようにはとても話せないことは十分自覚しているし、話した後で「今の発音は駄目だった」と反省することがしばしばである。相手から私の質問に対してそれなりの返答があるところから察するに、外国人のベトナム語ではあるが、何を言っているかくらいは伝わっているという程度のものではないだろうか。もっとも、私の話し相手の大半は外国人の下手なベトナム語に慣れている人々であるため、それを割り引くと、私の話すベトナム語の程度はさらに下がる。

その程度のベトナム語ではあるが、私には実に不思議な体験がある。ハノイからほぼ真北に300キロ以上も離れたところに、カオバン省がある。中国と隣接しており、ホーチ・ミンが1941年に約30年ぶりに祖国帰還の第一歩を記した場所としても知られている。2000年に初めて当地を訪れ、人民委員会（省政府）の幹部と面会したとき、何と聞きやすいきれいなベトナム語なのかと驚いたことがある。努めて聴こうとせずとも、幹部の話すことが、自然と私の頭の中に入ってきて、しかも漏れることなく留まっているという感じだった。このときは、私などとても太刀打ちできないほどのベトナム語会話をもち日本人研究者たちと一緒にだったが、宴会のときにやむなくスピーチしたら、幹部の一人がわざわざ私のところに来て、「あなたのベトナム語は大変聞きやすい。他の方々は話すことに無理があるようだ」と言ってくれ、痛く感激したのを覚えている。

また、一昨年久しぶりにカオバン省を訪れたとき、チュンカインという町の茶店で同行者（ベトナム人）にあることをたずねたら、聞き返された。しかし、そばにいた茶店のおばさんは聞き返すこともせず、即座に私の期待していたことを話してくれたのだった。

以上の事実が示すように、私の話すベトナム語はカオバン省で話されているベトナム語であることはほぼ間違いない。しかし、私にベトナム語を教えてくれた先生の中に、カオバン省出身者は誰一人としていない。カオバン省出身の女性と交際して、私のベトナム語に磨きがかかったなどという美しい経験もない。考えれば考えるほど不思議である。私とカオバン省を結びつける絆は何なのだろうか。それを調べるために、今後もハノイからいくつもの峠を越えて、カオバン省に足を運びたいと思う。■

くりはらひろひで

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長、教授（所属は情報資源利用研究センター）。1987年東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。博士（学術）。専門はベトナム現代史、中越関係（1950年代）、現在）研究。著書に『コンメンタル・システムとインドシナ共産党』（東京大学出版会、2005年）、『ニクソン訪中と冷戦構造の変容』（共著、慶應義塾大学出版会、2006年）、『東南アジアの歴史』（共著、有斐閣、2003年）など。

2. 無名な民衆の文学を聴く

文学を聴く

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 准教授
米谷匡史
Text: Masafumi Yonetani

現在、 文字で書かれる詩や短歌は、黙読されるのが普通である。詩集や歌集は、書店で購入される商品となり、愛読者によって部屋でひっそりと読まれる。文学の愛好は、密やかな孤独な愉しみと なっているようだ。

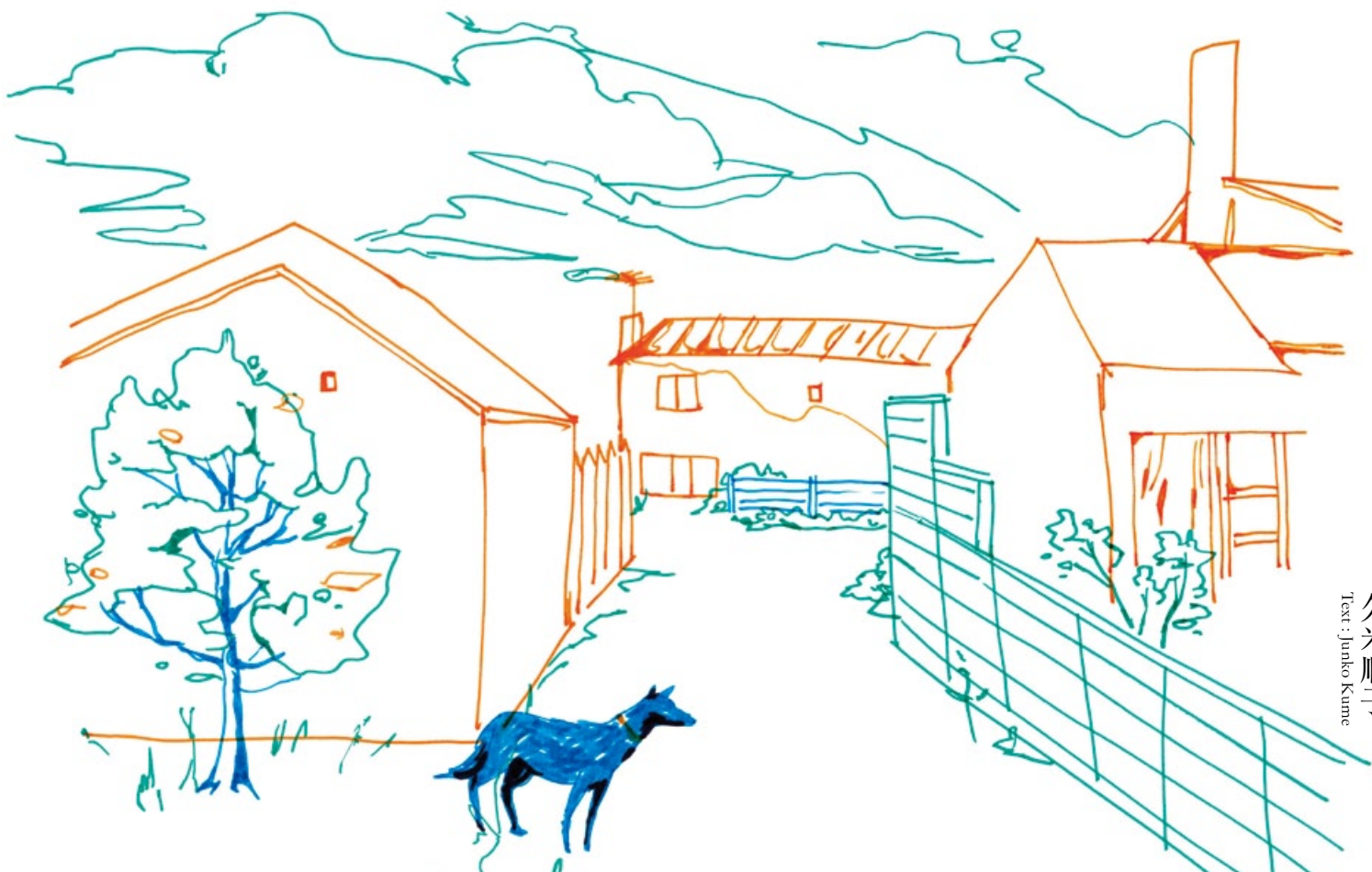
しかし、詩や短歌は元来、声に出して詠まれ、聴くものでもあった。その声に宿った文学の力をとりもどそうと、詩の朗読会が開かれたり、「絶叫短歌」のコンサートが開催されたりする。

ただし、特定の誰かが声に出して詠み、それを聴衆が聴く方式とは別に、読者が集団で、詩や短歌を声に出して読む、という方式もあった。戦後日本の1950年代、「サークル文化運動」が盛んだった時代のことである。当時は、各地の職場や地域で無数の文学サークルが結成され、詩や短歌、小説や批評を発表する雑誌が発行された。その多くは活字ではなく、手書きのガリ刷りで文字が刻まれた手作りの雑誌だった。

それは、たんなる文学愛好者の同好会・同人誌ではない。無名な民衆が、自ら文学を表現し、たがいに読み、批評しあう「集団」の活動だった。文学や文化を、著名な文学者が書いた商品という形式から解き放ち、無名な民衆の表現として変革しようとする試みである。

そこでは、詩や短歌は、「集団」で声を出して読み、批評しあうものだった。人々が文学をつうじて響きあう「共鳴板」があったのである。近年はようやく、当時のサークル雑誌が注目をあつめ、再評価されはじめている。「サークル村」「チンダレ」「東京南部サークル雑誌集成」など、不二出版より復刻。

無名な民衆が表現し、商品として流通することなく、声に出して読まれ、響きあう文学。それを今、実際に声に出して「集団」で読んでみる。そこには、連帯の感覚や調和とともに、軋みや不協和音も響いている。さまざまな苦悶の声や喜びの声。そして、行間に余韻のように響きわたる沈黙。それを「聴く」ことで、文学は新たな息吹とともによみがえってくるようだ。▼



3. スペインの塔から響く声と鐘

大学院総合国際学研究院
言語文化部門 講師
久米順子
Text: Junko Kume

スペインでは、

どんな小さな村にも必ず一

つは教会がある。町や村を一望しただけでそれが分かるのは、教会につきものの鐘楼のおかげである。ミサの時間には鐘の音が辺りに鳴り響く。ミサだけではない。さまざまなパリエーションを有する鐘の音は、洗礼式や結婚式などの祝い事、弔い、あるいは火事や敵の襲撃といった危機を村人たちに知らせる役割を果たしてきた。

鐘が吊るされる鐘楼の形はさまざまである。聖堂入口の上部などに壁を一枚積み上げて鐘を置いたものも少なくない。遠目には聖堂からよつきり突き出しているように見える、建物と融合したタイプの塔もあれば、やや離れたところに独立して建っているものもある。いずれの場合も、スペインでは圧倒的に方形プランで、円形プランの塔はほとんどない。

独立した方形プランの塔の一部は、実はかつてはモスクの塔、すなわちミナレットであった。よく知られているとおり、スペインには711年から1492年にかけてイスラームが存在していた。人々が集まり、祈りを捧げたくなる場所というのは太古からそう変わらないものなのか、異教の祠やローマ神殿があった場所にキリスト教の教会が建てられて、イスラーム支配下でモスクに転用され、レコンキスタ後に教会に戻された例はスペイン中で枚挙にいとまがない。建物の多くは改築が繰り返されたが、光を浴びてきらめく釉薬タイルや陶器をはめこんだり、煉瓦の並べ方を工夫したりして外面に装飾が施された塔は、イスラーム時代の名残を留めていることが多い。

ミナレットもカトリックの鐘楼も、生活の基盤となる祈りの時間を共同体に告げるために建てられた高さのある建築である点には変わりがない。しかし大きな違いもある。ムスリムに礼拝への参加を呼び掛ける人(ムアッズイン)は、楽器の類は一切用いず、必ず肉声で朗唱していたのである。そのため、ミナレットは人が上れる構造になっていなければならない。一方鐘楼の場合は、最上部に鐘さえ設置すれば、操作そのものはロープで下から行うこともできる。こうした違いから、セビーリヤのヒラルダの塔をはじめ、現存する多くの元ミナレットは最上部のみ改築されている。

それにしても、支配的な宗教が変わっても、同じ塔が何世紀にもわたって村人たちの生活を見守ってきたのだと思うと感慨深い。トレドやグラナダといったかつてのイスラーム都市で、元ミナレットの面影を残す塔から鐘の音が聞こえてくると、ムアッズインの声の響きが一瞬、甦ってくるような気さえしてくる。▼

よねたにまさふみ

1993年東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退。専門は、日本思想史・社会思想史。著書に、「アジア/日本」(岩波書店)、「1930年代のアジア社会論」(共編著、社会評論社)、「谷川雁七レクシオン」(共編著、日本経済評論社)、「尾崎秀実時評集」(編著、平凡社)、「東洋文庫」(沖縄/暴力論) (共著、未来社)、「ポスト(東アジア)」(共著、作品社)など。

くめじゅんこ

2008年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導終了退学。日本学術振興会特別研究員SPDを経て2009年10月より現職。博士(文学)(早稲田大学)。専門はスペイン中世美術史。

「中東サイドから情報を発信したい」

小島明
アラビア語専攻
2年

Influential Face

歴史を刻む 在学生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Kenji Takanaka



〈上〉練習は週3日。フェンシングは狭い範囲の中で攻め方を瞬時に組み立てるスポーツ。
〈下〉アラビア文字を1週間で覚えてくる宿題が一番きつかった。今はアラビア語の会話が楽しい。



フェンシングの剣が交差する音が、体育館に響き渡る。激しい突きの応酬。白いユニフォームに身を包んだ小島明さんの伸びやかな長身は一層目を引く。

「アニメの影響で、子どもの頃からフェンシングがやりたかった」という小島さん。外語大にフェンシング部があると知り迷わず入部した。初心者だったが、同期や先輩に助けてもらい技を磨いていった。

「フェンシングのおもしろさは頭を使うところ。突きが決まった瞬間は最高です」

文武両道を地で行く小島さんの専攻は、アラビア語だ。その原点は、小学5年の頃に勃発した9・11テロだった。

「欧米と比べて、中東のニュースはなかなか報道されません。たまに報道されても、中東は危険だ、女性差別がひどい——と、ステレオタイプな内容ばかり。その理由は、日本にアラビア語を使える人が少ないからじゃないか。ならば、自分にやれることもあるのでは、と思ったんです」

アラビア語の難しさは、文語と口語のギャップの大きさにある。2010年春、初めてドバイ、シリア、エジプトを訪れたが、「学校で習った文語で話したら、皆に笑われました」。

旅先のエジプトでは日本語専攻の留学生に歓待され、アラビアン・ホスピタリティを堪能。だが、国連統治下にあるシリアの紛争地帯に行ったときは、対イスラエル戦争の生々しい傷跡を目の当たりにした。生の中東が見せた光と闇の両面。それは、小島さんの心に鮮烈な印象を残したようだ。

将来はジャーナリスト志望だが、中東建築史の研究にも興味があるという。

「ジャーナリストとしては、中東サイドからの報道がしたい。今、中東の新聞を和訳し紹介するプロジェクトに参加していますが、将来のためにもさらに力を入れていきたいと思います」

平日の平均睡眠時間は4、5時間。寝る間も惜しんで、学業、部活、ボランティアと多忙な毎日を過ごす。■

Mei Kojima

2009年東京外国語大学入学。
フェンシング部に所属し、2009年秋の第9回北岡杯フェンシング選手権大会では個人女子エペ部で第8位に。
広島県出身。

受け身ではなく、積極的に。
自分から発信することが大事。

01 東京外国語大学出版会が 新刊を發行

ダーウィンが『種の起源』を書いた19世紀は、人類が知的・思想的にダイナミックな変革を遂げた時代でした。そのとき生まれた科学的な知識や発見は、現代の私たちに多大な影響を与えています。本書は、自然科学と人文科学の相互関係を、豊かな創造性をめつた異文化間コミュニケーションとしてとらえようとする、英文学・文化研究の大家による研究の集大成です。



『未知へのフィールドワーク
——ダーウィン以後の文化と科学』
ジリアン・ピア 著
鈴木聡 訳
2010年12月発行
A5判/上製/528頁
定価:4,410円(税込)

※東京外国語大学出版会は、東京外国語大学の学内組織として2008年に発足しました。
<http://www.tufs.ac.jp/blog/tufspub/>

03 経済産業省委託の実証事業 国際医療通訳講座が開講

近年、日本の医療現場は、外国人患者と医療関係者との円滑な意思疎通を図るため、高度な語学能力と医療知識を持つ通訳を必要としています。本学は、2010年10月に経済産業省委託の実証事業として、国際医療通訳者(中国語、ロシア語、英語)を養成する講座を開講しました。約40人の受講者を集め、講義に加え、病院実習などを通して、通訳技術、医療知識の向上を図りました。

02 外交官試験を支援する プログラムがスタート

外交官を目指す学部3年生を対象にした、受験支援プログラムが2010年8月にスタートしました。期間は、約8カ月。プログラムの主な内容は、憲法、国際法、経済学、行政法、民法の5科目について、実践的な知識とスキル習得のための補習授業の実施、試験科目の答案作成練習、集団討論・面接など。次回の募集は5月で、定員70人、受講料1万円(教科書代別途)を予定しています。

——2012年度、外国語学部が生まれ変わります。そこに至った経緯を教えてください。

外 語大の外国語学部では、優れた語学教育だけでなく、実際に、国際関係や経済学、思想や文化の研究といった、語学以外にも多様な分野が総合的に組み合わさったとてもユニークな教育を行っています。

今、こうした特色を明確に示すために、グローバル化をはじめとする日本の成長戦略に沿った形で大きな改編をすることにより、将来に向けた外語大の形を具体的に提示すべきだという切実な思いがあるのです。

外からの印象と、内側で行われている教育に差異があったということですね。具体的にはどのようなように変わるのでしょか。

まず、外から教育内容が見えるようにすること。そして、入学した学生が何を指すのかを明確に意識して勉強できるように、外国語学部を再構成し言語文化学部と国際社会学部を設置する予定です。実際の教育内容がわかる2つの新たな学部名に変えることで、カリキュラムの整備もさらに進み、

理想的な学習環境が整うと考えています。受験生は本学で何を学べるのかをイメージしやすくする必要があります。



は、これまでも国際政治や国際関係、国際経済、国際法などに興味がある学生が多く、実際、国際機関への就職を希望する学生も大勢いました。そういう学生の要望に応えられる体制を、明示できたいと思っています。

それだけではありません。教養教育を強化し、語学教育をさらに充実させるため、2学部共通の「世界教養(仮)」という教育プログラムを設ける予定です。学生は入学した初めの2年間、地域教育、言語教育、教養教育を修めます。ほかの大学には例を見ない、充実したユニークな教育体制になるでしょう。

さらに、現在の世界情勢に対応して、いくつか重要な地域を教育課程に組み込むことも考えています。アフリカ、中央アジア、オセアニア、南アジアです。

新しく設置される2学部の特徴を教えてください。

言語文化学部では、言語研究と文化研究を総合的に教育します。社会で実際に使える力を身につけられる内容やコミュニケーションに関わる内容を盛り込む予定です。国際社会学部では、国際社会に対応する学術的な内容を取り入れた教育を行います。本学で



外語大は、2012年4月に向け
外国語学部を再構成し
2学部制を検討している。
魅力あふれる質の高い教育・研究を、
学内外により明確に打ち出す形だ。

外国語学部を再構成 伝統の中に新たな息吹

藤井守男

Morio Fujii
外国語学部長・大学院総合国際学研究院・言語文化部門教授



ふじい もりお
1977年東京外国語大学外国語学部卒業、81年同大学院外国語学研究所修士課程修了。文学修士(東京外国語大学)。専門はベルシア文学。